

# 人文知探訪プログラム 北前船の時代を巡るレポート

令和5年10月9日(祝/月)開催



① 旧野崎浜灯明台

P7



② 旧野崎家住宅

P8



③ 鷺羽山展望台

P13



④ 下津井町並み保存地区

P15



⑤ 玉島市民交流センター

P24

## はじめに

- 令和5年10月9日(祝・月)、北前船の時代を巡る人文知探訪プログラムを実施しました。
  - 林原美術館館長・谷一尚氏とボランティアガイド様ご案内のもと、旧野崎浜灯明台、旧野崎家住宅、鷺羽山展望台、下津井町並み保存地区、玉島市民交流センターを探訪しました。
  - 今回は企画委員含め32名が参加しました。
- JR倉敷駅を出発、今回も美袋交通様にご協力いただきました。
- 児島方面へ向かう車中では最初に小林事務局長から開催のお言葉をいただきました。

## 9：00 バス車内にて講義

- 小林事務局長「この度はたくさんのご参加をいただきましてありがとうございます。今回の北前船については全国で様々なイベントが行われております。先週には岡山県でも5つの市と商工会議所で北前船のフォーラムが開催されました。岡山県では瀬戸内市、玉野市、倉敷市で北前船に関する資料が残っております。今回は児島、下津井、玉島の三か所でゆかりの地を散策します。身近に歴史上重要な史跡があることに気づき実際に体験することで勉強になればよいかなと思っております。今回も解説は谷一館長へ依頼しましたので楽しいお話を聴いていただけたと思います。4回目の開催となりますが本日もお楽しみください」

開催挨拶の後、早速谷一館長から北前船についての解説がありました。

- 谷一館長「本日も宜しく願いいたします。北前船は文化庁の決めた読み方としてはキタマエブネですね。実は山陽新聞にも先日掲載されました。私が述べた内容から話をさせてもらいます」

実際の山陽新聞掲載箇所を参加者の方にも回覧し読んでいただきました。

- 谷一館長「菱垣廻船や樽廻船というような言葉で歴史の教科書には出てきます。このうち日本海側、そして北海道、瀬戸内海を周って大阪難波の港へ入っていく航路を北前航路と言います。この航路に使った船を北前船と呼ばれます。かつては北前船で潤っていた港町、それが現在はさびれてしまった



ので文化庁が過疎地対策として予算を取り、観光の起爆剤として北前船というテーマが使われるようになりました。これが日本遺産と絡んできます。



実際に北前船の時代が一番、海運がダイナミックに動いていたのですね。山陽道や東海道といった江戸を中心とした五街道が整備されるのは江戸時代になってからで、それまでは道も狭いし山道となれば賊が出ますから陸路というのは交易には使われていませんでした。陸上交通はそれほど重きをなしていなかったのです。よって流通のルート、交易のルートとなると船になるのです。船であれば色々な荷物が積めますし、特に岡山県は三大河川と言われる吉井川、旭川、高梁川がありますからそこが南北交通のひとつの拠点となり、それが流れていくのが瀬戸内海。よって瀬戸内海で大きな荷物に積み替えて物資を運んでいくというようなことが行われていました」

高瀬舟という森鷗外の小説でも有名な舟がありますが、もともとこの名前は岡山の河川のうち吉井川の流通を支えていた舟の名で、それを色々な形で取り込んで日本各地にそのシステムが導入されていったような歴史があります。岡山の河川流通がルーツということですね。高瀬舟の頃は海運がダイナミックに動いていた時代で、17世紀から明治時代までこの流通ルートが大きく扱われていました。それが現代ではなぜ廃れたのか。もちろん和船ですからよく沈むことがあります。もし船が海路を通って帰ってくれば一千両、今で言う1億円くらいの利益が出たと言われていています。船主は一度船を回せば1億円入ってくるわけですから流通には大きな重要性を持たせていました。

ところが明治時代になると日本全国に鉄道が敷かれるようになり、岡山総社間や津山方面へのルートを持つ私鉄が出てくるようになりました。鉄道が開通したことで江戸時代までの船の流通ルートは採算が取れなくなり、次第に使われなくなっていきました。17世紀初頭から20世紀にかけてまで使われた大きな交易ルートが北前船だったというわけです。

岡山では吉備の穴海と言いますが、岡山の南側は高松城の水攻めでもわかるように泥の海でした。汽水と呼ばれる海の水と川の水が交ざりあう場所で海産物も取れる所で、この吉備の穴海の特徴を利用して古い時代から海運が盛んでした。古墳時代から活用されていますし、宇喜多氏は宇喜多堤を造って児島湾の開拓をしていきました。宇喜多氏は児島の海運業を取り仕切って利益を上げ、岡山の支配へ乗り出していくのです。そのように各地の豪商が大量輸送に最も適していた船、海運を使って北前船の船主になるわけです。船主とは別に船頭という乗組員を束ねる人たちがいて、それを船主から背負うのです。

船荷には2種類があります。船主がここからここへと運送依頼する荷物と、運航を請け負った船頭が自分の裁量であちこちの港をまわって色々な物資を買い込み、それらが無い地域で売るための船荷です。地域に無いものはみながそれを欲しがりますから10倍、20倍の値段で売れます。北前船の文献をたどりますと、Aの港とBの港のどちらに寄ろうかという話が出てきます。Aの港はいつも買い物してくれて高い値段でも買ってくれるけれどBの港はいつも買い叩くからBの港には寄らない。Aだけに寄って行こうというようなことを船頭は判断していました。Bの港も困りますから北前船が到着したとわかったら、うちにも寄ってくれという交渉の記録が残っているのです。何々をこれくらいで買うから是非寄ってくれと言われたのに実際は半分しか買ってくれずケチでつまらないからもう寄らない、というような文献がいくつもあるわけです。基本的に岡山県は汽水域ですから塩分が残っている水でお米が育ちません。そこで綿花を育てるのですがそれに必要だったのがニシんカスであります。北海道から運んでくるそれを児島の綿花地帯は待っていましたから、北海道では不要なニシんカスを高い値段で買い取って綿花の肥料にしました。

岡山からは塩などを積み込んで持っていきました。たとえば山形県名産の米が入ったとなると港で大量に買って大阪へ運びみなさんのお腹を満たすわけですが、大量の米などは陸路の運送では難しいですね。だから船が大いに活用された時代でした。北前船は船頭が行商のようにいるスタイルですから寄港地で需要が見込まれるものを大量に買っておいて別の寄港地で売りさばく。交渉上手でないと務まりません。岡山の綿花は寒い地域の呉服に使うものとして求められたのでそれを持っていくということが多かったようです。地域で貨幣価値が異なっていることもあったのでそれで利ザヤを稼ぐということもあったようです。江戸時代でも慶長小判のような質の高い金が海外に流出するということで幕府が介入を行いました、それが国内のインフレを招き幕末の動乱に繋がったとする考えがあります。海上交易が江戸幕府を滅ぼし明治維新へつながったというわけですね。薩摩は北前船を使って秘密に琉球へ行ったようですが、琉球との密易で利益を蓄えて明治維新に使っていく、ということが起こるのです。海運が歴史上大きな出来事と関わるのです。

江戸から明治の経済を考える上で、北前船の存在は大きいですね。経済の大動脈となる船でした。鉄道の発達で経済構造が変わってしまい街の発展度合いも変わってしまった、と日本海側の大きな港町の方々は思っていたことでしょうか。交通の要も船から鉄道へと国の要請とコストで変わっていく歴史があるわけです。

また、船はよく沈みますから安全を願って絵馬を奉納していました。戻れば儲けが出ますが沈めば元も子もないですね。安全に戻ってくることは船主の切なる願いですが、そういった願いが地元の神社やこの後訪問する祇園神社にも関わってきます。そのような祈りを含めて北前船の光と影を見ていただこうというのが今回の探訪です」



# 10:00 児島鎮魂之碑と旧野崎浜灯明台

- 児島鎮魂之碑

谷一館長「海運で亡くなった方の鎮魂碑ですね」  
参加者は碑に刻まれた文字を読みながらゆっくり周囲を  
歩くことが出来ました。



- 旧野崎浜灯明台



谷一館長「味野、赤崎浜の元野崎浜が築造されたのが  
文政12年、そして文久3年には波止場の一角に灯明台が  
建てられました。幕末には北前船の訪れも頻繁だった  
ようですね。明治には塩田の廃止などもありましたが  
昭和40年代くらいまでは実際に使われています」

江戸時代の風情を感じる古風かつ美しい造りに参加者  
も興味津々で見学しました。

# 10 : 15 旧野崎家住宅（国指定重要文化財）

- ここでは学芸員の宮崎様に邸内を解説、案内いただきました。
- 宮崎氏「今日は野崎家にお越しいただきありがとうございます。こちらの野崎家は今から194年ほど前、江戸時代後期から製塩業と新田開発など経営を行っておりました。家自体の敷地は全体で4000坪、建物は延べ床が1000坪ほどございます。近年は映画やテレビの舞台としても活用されていますね。玄関の土間から部屋の奥行などご覧ください」





- 宮崎氏「最初の玄関は普段使いとして利用されており5部屋ご覧いただけます。次の玄関は表玄関で正式なお客様用玄関ですね。畳表が敷かれている珍しい構造です。明治24年に電気を灯したとの記録もありますが元々明治時代は自家発電で明かりを灯しており当時の傘が今も残っています」
- 宮崎氏「野崎家は塩をつかって財を成した家ですが、北前船で塩を煮詰める燃料を九州方面から運んできたようです。岡山でもわずかにあったようですが主には九州だったようです。野崎の塩はよく北陸地方に運ばれていたとの記録がございます。こちらは表書院で客間として利用されていました。右側奥には茶室がございます。当時のケヤキが見えますのと、瀬戸内海は石が豊富に採れましたからその石を持ってきたようです。中央の大きな石は別名で御籠石と呼ばれ、お客様が籠で来られた時にはこの大きな石の上で籠をおりて座敷へ上がられたとも言われています」





- 宮崎氏「庭の造りは広い意味での枯山水になっています。庭には茶室が3つございます。速水流の流派で一生懸命お茶をしていたようです。建物の欄間はとても斬新な形ですが、速水流3代家元宗寛がデザインされたものをここへ使ったようです。表書院の奥には水琴窟もあります。

庭の木々はサツキが多く植えられており春には華やかですよ。重森三玲が調査に来た際、おそらく岡山後楽園を模したのではないかと指摘したそうです」



- 宮崎氏「奥には石垣があります。石垣自体は100年程前の大正時代に造られました。石垣のところには手すりがありました。戦時中に金属供出のため回収されたようです。野崎家から1.7トンくらいの金属を出したとの記録もあります」

・宮崎氏「こちらは従業員が使用していた台所や洗面台、台所ですね。100年前から水道を使っていたようです。当時の道具がそのまま残っておりますがアイスクリーム製造機やワッフル製造機などは面白いですね。電気やガスが使えるようになった頃の道具も残っています」

・宮崎氏「土蔵の蔵は焼き板を使っています。杉の板をしっかりと焼いているので虫がつきにくい、火が移りにくいという特徴があります。崖のほうには防空壕を掘っている途中の穴が残っています。途中で戦争が終わったため掘ることをやめたようです。児島地域は直接的な空襲に遭うことはなかったのでこのように邸宅も残りました」「こちらは味噌をつくっていた蔵ですね。漬物や醤油もつくっていましたが塩田で働く従業員に現物支給をしていました」「蔵の展示館には野崎家と交流があった方々や自ら収集したコレクションの書画があり、そちらを展示しています。田能村直入の掛け軸もあります。野崎家は塩販売だけでなく、それによって建物の維持管理や書画骨董の保管を行っていました」



・宮崎氏「庭に丸っこい石がたくさん並んでいますが、これは分銅の石として利用されていました。溜め石とも試す石とも言われたようですが1つの重さが約60キロあります。それを空の船に10個積みめば600キロ、そうすると船がわずかに沈みますからそこへ印をつけます。ここまで船が沈むというのを把握しておいて、そのあと塩や石炭を積みこんで船が印まで下がったら600キロ分を積んだということがわかるようになっていたようです」



・宮崎氏「あちらは船に乗せる船箆筒ですね。船にも金庫をのせますが、もし船が沈んだとしてもこの金庫だけは沈まないような作りになっています。手前側が開きますがそこに金属をたくさん接着して重くしていますので、手前側を下にして沈むため中に空気が残って金庫自体は沈むことなくどこかへ辿り着くようになっています。鍵がずっと閉まっていたのですがテレビ番組で開けてもらいました。抽斗がたくさんありましたが中は空っぽでしたね」



お世話になりました。

Thank you ♡(^ ^)/



# 11:10 鷺羽山展望台

北前船の航路に思いを巡らせようと鷺羽山展望台へ行きました。お日さまも顔をのぞかせて、瀬戸大橋のかかる瀬戸内海を一望することができました。



人文知の「人」ポーズで参加者みな素敵な笑顔です！

書籍のご紹介



「人文知」を考える  
大原謙一郎著  
発行日：2023年4月20日

## 11:30 下津井へ向かうバス車内

午前中に訪問した旧野崎家住宅、鷲羽山展望台について谷一館長から補足解説がありました。

谷一館長「先ほどご案内いただいた野崎邸は立派なお宅でしたね。野崎さんが船主であったという記録はかなり残っております。ただ、恐らく塩の関係の船主だったと思われるのでそれが北前船だったかどうかというのは野崎邸の記録の中にはありません。ですから人によっては北前船の船主さんとして野崎さんをあげる人もいればそうでない人もいます。そこについては解説の方もだいぶ苦労されたみたいですね。

船簞笥はご覧いただきましたか。あれが船と関係していたことは間違いなくて、テレビ番組にも取り上げられました。鍵がなくなっていて開けることができなかったけれど、鍵屋さんが来れば簡単に開くのでしょうか。野崎邸では開けられなかったものが数分で開錠したわけです。でも中身は何もありませんでした。全て引き出した後に鍵をかけていたのでしょう。

そのあとは鷲羽山へ行きましたね。だいたいの北前船は航路が一方通行でして、日本海側から下関を通過して瀬戸内海に入って大阪に入る、というのが基本的なルートです。その航路の一端を鷲羽山から眺めてみた次第です。参加者はお天気の方が多いのですね。日頃の行いが大変よくて、朝は雨が残っていたのに見事に晴れました。

今回は、岡山から西の北前船ルートを主にしていますが、この次は山鳥毛、国宝の日本刀を見る予定です。岡山の東側は今回の西側ほどには北前船の資料が残っていないのですがいろいろ貴重な資料がありますので、東は東でまた北前船のプログラムが出来ればいいですね。さて、下津井に到着いたしました」





# 11:45 昼食

下津井の「カンティーナ登美」で昼食会です。下津井の海鮮を美味しく堪能いたしました。

・今回のプログラムで初参加された方からお言葉をいただきました。



・また人文知応援フォーラムの賛助会員 高本昌宏様が開発されている「中高大学生が古墳案内をするアプリ」等についてもご紹介がありました。



探訪を重ねるごとに様々な縁が繋がっていくように思われます。

# 12:20 下津井散策

- じっくりと下津井の街並みを味わうため、今回は2チーム（かめさんチームとうさぎさんチーム）に分かれて散策しました。むかし下津井回船問屋→下津井街並み保存地区→祇園神社を、児島観光協会ボランティアガイド様2名ずつの解説をもとに歩きます。それぞれのガイド様の説明を合わせてご紹介します。

🐢 かめさんチーム：ボランティアガイド 熊城様      🐰 うさぎさんチーム：ボランティアガイド 宮尾様

むかし下津井回船問屋



- 熊城氏「この回船問屋、今この街並みで残っているのはこちらの回船問屋のみになります。この回船問屋は残念ながら江戸時代ではなく明治の初めに建てられたものになります。こういう風に残っているのは岡山県が買い上げまして整備されております。そして倉敷市がやっておりますけども、こういった形で昔の面影が全く損なわれずに保存されております。特に特徴はこの蔀戸。防犯上に、これは夜になるとこちらを落として向こうから入って来られないようにする役割があります。こちら下津井はどうして港町になっているのかということですが、みなさんご存知のように昔の児島半島は海でございます。江戸時代の初めに陸続きになって、児島地区を中心に玉島地区、こちらも海辺に近いですから稲作に適しておりません。ですから綿を植えて綿織物を作ると言う産業が江戸時代にあったわけです。そのために北前船がこういったニシンカスを運んでくるのです。北前船は年に1回大阪と北海道を往復します。北前船の船主はいろいろな地方、福井とか金沢とかいろんなところからくるわけです。



・熊城氏 まず大阪を3月に出発して産物を積んで、途中で寄港しながら色々な産物の売買をしながら瀬戸内海を西に進んで日本海に行き、北海道までだいたい夏前について向こうで商売して、向こうからは昆布、鯨かす、そういった海産物を仕込んでまた帰ってくる。帰ってきて大阪に11月末ぐらいに到着します。福井といった北の方の出身の船主さんが多かったので大阪で降りて年末正月は国へ帰る。国へ帰って春になったらまた大阪に出てきてひと航海するということになります。ひと航海で売買しながらだと1千両、換算のレートに拠りますけれど1億円ほどの稼ぎを得ることが出来ます。

こちらは帳場になります。こちらは床の間がある客間です。2階には民具が展示されております。これから港の方に出まして祇園神社の方へ出発します。ではこちら南の方から抜けて参ります」

回船問屋前の道路



・熊城氏「50年ぐらい前まではここは海の中でした。ここに防波堤があって、雁木があって海というような場所だったのです。主な街道というのは中の由加街道ですね、車も通っていました。瀬戸大橋の建設が昭和53年から建設が始まります。すると中の道を現場のトラックなどが通るわけにもいかないのでこちらを埋め立てて、海岸道路をつけました。よってこれは昭和50年代の道になります」

・宮尾氏「こちらの道路、実は海でした。35年前に瀬戸大橋が出来ました。その10年ほど前から工事が入りますので運送のため埋め立てて湾岸道路をつくりました。ということは、ここに建つ家はみな海の岸壁だったのです。船が着き、ここから荷揚げをして色々な品物を回船問屋に入れていました。このお宅を見たら分かりますが、向こう側にドアがありますよね。あそこまでが一軒の家で京都風の間口が狭く奥行きが長い町家です」

- 熊城氏「こちら、まだかな橋へご集合ください。こちら下津井まちなか保存地区です。昭和61年に制定されております。範囲は瀬戸大橋の袂、田之浦港から一つと由加街道を通りまして祇園神社の下まで約1.5km。この間が街並み保存地区になっております。昔の写真、見にくいのですがこのあたりくっきりとしている道がこの保存地区になっています。昔は家がびっしり詰まっていたのですが今は残念ながら歯抜け状態になっています。まだかな橋の石塔からこの辺りまで海が走っていたのですね。ここに中突堤がありましたので、まだかな橋のところからこのように橋が架かっていました。木造2つとコンクリート1つ。明治から昭和にかけての写真になります。なぜまだかな橋という疑問が生じますが...湾になっていたこの向こう側が花街になっておりました。船頭さんまだかなーと女性たちがこの中突堤で呼んでいたのもまだかな橋になったと言われております」
- 熊城氏「そしてここから山の上をご覧ください。山の上、台形になっています、尾根です。ここに下津井城というお城がありました。石垣が見えますか。これは宇喜多秀家が1592年から1596年にかけてここにあった砦を改修して、備前藩の南の防備としてのお城を築きました。その後に池田家が面倒を見るわけですが、池田家になってから防備を固める為にもっと手を入れたお城になっていきます。こちら左の西の端から、西の丸、本丸の段、二の丸、三の丸、中の丸そこまで尾根筋560メートルで作られています。そして真田丸のように東の出丸を作っているのです。それを入れますと650メートルという非常に立派なお城になっていました。簡単に登れます。向こう側に駐車場もあるので上まで登れます。景色がとても素晴らしいのですよ」
- 宮尾氏「下津井城の最後の殿様が池田由成で、実は赤穂と繋がりががあります。ここの城主の子供で六女の熊子が大石家に嫁ぎます。その生まれた子供が大石内蔵助です。ですから備前とは非常に濃い関係があります。忠臣蔵の大石内蔵助とここの城主は祖父と孫になります」

# 祇園神社



・熊城氏「それではこれから祇園神社に上がってまいりたいと思います。祇園神社の概略を申しますと、長浜社というものがございます。江戸の中期から末期、1700年の後半から鞆の浦の祇園社から移してこられましたので、今では祇園社ともいわれています。ですから今では海上の守りを担当されております。ちょっと一風変わった神社ですよ」

・宮尾氏「玉垣を見ますと能登や越後の文字がありますね。いわゆる回船問屋の船主が寄贈しています。日本海の船主が寄っていたことがわかります」「ここは歌舞伎小屋がありました。上の方には当時の千両役者の落書きがあるそうです。当時の金神輿もありますね。ここは説明がないと何の場所かわかりにくいでしょう」





(祇園神社の階段の麓にて)

- 熊城氏「こちらは砲台です。幕末ですから外国船が攻めてくる可能性がありますので、岡山藩は県内に3か所設けて、下津井地区は特に重要視して、真ん中の砲台、瀬戸大橋の下の田之浦にもう1つ、それから下津井電鉄の終着駅のあたりにもう1つの3か所に設けております。これがその砲台のあとです。海の方に向けて大砲を並べていたようです。それがなくなったら（台場跡には）料亭、社員寮となって、そして今ではデイサービスになっています。ここから見えるのは、釜島、四国の五色台、本島、長島ですね。長島はその形からねずみ島とも言われています。今日は霞んでいますので金毘羅さんが見えませんが」
- 熊城氏「この奥にありますのが本殿になりますけども、本殿をよく見て頂いたら2つあります。東側と西側別々に建てられています。東側が長浜社、西側が祇園社。本殿が2つ並んでいる形を相殿と呼ばれます。相殿の本殿は非常に珍しい。右の東社は塩飽大工が作ったと記録が残っています。ここに来るまでの玉垣は大体北前船の船主の名前が書かれておりますがこの玉垣はちょっと変わっています。この左右に女性の名前が入っています。すぐこの下が遊郭、花街なものですからこのあたりは遊郭の方が寄贈された玉垣になっています。この本殿の後ろには高台があります。昔はこちらに砦があったと言われております」





- (下津井町並み保存地区にて)

- 熊城氏「こちらは倉敷市指定の共同井戸になります。水の分岐点で、こちらの井戸（北）は真水、こちら（南）は少ししょっぱい。手前が鶴井戸（北）、奥が亀井戸（南）。きっと縁起がいいので鶴と亀という名前を付けたのでしょうかね」
- 宮尾氏「350年前の井戸と50年遅れの井戸ですね。下津井の港へ来る船は食料と一緒に大量の水を運び込みますが、この井戸へ汲みに来たということです」

- 宮尾氏「兵庫県の方が観光バスでわざわざこちらを見に来ました。何が珍しいかということ、屋根を支えている軒ですね。持送りの木の表裏を見てください。すべて異なっていますね。塩飽大工の彫り物ではないかと言われていますが非常に美しいですね。こういった細部にまでこだわっているのが昔ならではのですね。当時のままの軒先丸瓦があります。三つ巴は火事除けとして全国の瓦屋が造った模様です」

「伊能忠敬がこちらへ泊り、御礼の品を贈ったと言われるお宅もありますね」



# 13:40 下津井へお別れバス車内

バス出発前、地元の方からサプライズで下津井節を御披露いただきました。たっぷりとした節回しと切れのある歌声に一同「かっこいいね。素敵だね」と拍手喝采。

北前船と関わりある楽曲も流し、歴史ある港町に思いを馳せました。

・道中では下津井の街並みと歴史について谷一館長から補足解説がありました。

谷一館長「地元の神社に祇園社を取り込んで名前を祇園神社にしました。なぜ祇園神社が上位になるかと言えば、池田藩が認めなかったが唯一港町だけに認めていた遊郭と関係があります。祇園のノウハウを取り込むために芸妓らをこちらへ呼んだ可能性があり、その者たちの信仰対象が祇園神社でした。祇園神社の玉垣には女性の名前がいくつかありましたね。岡山藩の池田光政は厳格に儒教を唱えますので、お墓も儒墓なのです。そのあとの藩主はまた仏教に戻してお墓を持つようになりますが何代かは儒教のお墓を取り入れます。それくらい厳格に規律を守りますから岡山藩では港町以外の遊郭が一件もありませんでした。遊郭だけでなく相撲興行も勝手に行うことはできませんでした。全く見られないわけではなく、どうやら藩が主導していたのです。今のオリエン特美術館のそばにある甚九郎稲荷神社というのは、一説には池田公が連れてきた甚九郎相撲取りが北の橋上でしこを踏んだら橋げたが外れたという話から北の橋を甚九郎橋と呼ぶようになり、その傍の神社も甚九郎稲荷神社と呼ばれるようになったのではないかと聞いています。





祇園神社にあった歌舞伎舞台のそばに狛犬が二重になっていましたね。石の狛犬と備前焼の狛犬がいました。なぜそのようになったのでしょうか。甚九郎神社の場合、備前焼の狛犬が割れてしまってそのあとに石の狛犬が奉納されています。古いほうを捨てるわけにはいきませんから2種類の狛犬がいるわけです。それと同じ経緯かもしれませんね。歌舞伎といえば歌舞伎役者も船を使って香川県と行き来していたと思われまますから縁が深いものになります。

私たちが子供のころに借り物競争がありました。父兄参加の競争では紙に書かれている物を探すだけでなく相手を探すというのもありまして、例えば有名な番の名前が書いてあります。歌舞伎の題材の番が書いてあったのです。相手役の名前が入った人を探してゴールするのですが歌舞伎の知識がないと番は分かりません。一般庶民がぱっとみてわかるのですからすごいのですが、江戸時代以来、神社奉納の歌舞伎で有名な場面を取り上げた農村歌舞伎や地方歌舞伎で役を演じていたのかもしれない」



# 14:30 玉島市民交流センター

備中玉島観光ボランティアガイド様から船についての解説をいただきながら、展示物をじっくりみてまわりました。



- 西氏「下津井は現在倉敷市ですが、北前船のころは岡山藩ですね。こちらは備中松山藩ですからいっくらか違ってきます。今から370年ほど前の玉島は全部海で、干拓地でした。そこから北前船が入るようになりました。玉島の北前船と干拓の歴史、積み荷についても展示しています。10分の1スケールの船も展示されています。船の構造について説明いたします」
- ガイド様「こちらは千石船の模型です。千石船と北前船は違います。千石船は米を千石積めるのでそう呼ばれています。重量のことです。すべてを千石船と呼ぶわけではなく三十石船というものもありました。北前船はルートの呼び方ですね。荷物はたくさん積めるほうがよいということで実際は千五百石ほど積んだとも言われています。
- 船の構造のうち、帆を見てください。縦1枚が1反ですからこの模型は24枚ありますね。24反帆と言います。この反数によって船の積み荷量が決まります。よってこれですと八百石が積めます。千石船となるともっと大きな帆になります。一番大きかったのは北陸で二千石船というのがあったようですよ」



- ガイド様「船には帆がたくさんあるほうが都合も良いわけですが、この船には帆が1枚しかありません。なぜかという徳川幕府が帆は1枚しかいけないと定めていたのです。幕末になりますと幕府の言うことも聞かずたくさん帆がついた船が走るようになりました」
- 西氏「北前船は商売をしながら北海道から大阪まで動く船のことです。玉島の何がいいかという、たくさん産業がありました。塩に強い綿や麦、お茶やお酒と作って売れるものがあるのです。ぐるりとまわってみてください。玉島つまり備中松山藩が栄えたころの様子がわかると思います」
- 参加者からは船員の数やその役割、船底の形の違いについてなど様々な質問が飛び交いました。
- 質問や展示パネルの内容について大変ご丁寧な解説をいただきました。



身近にある史跡を歴史ロマンと一言で終わらせるのはもったいないことで、古代の人々から連綿とつながる思想が現在の私たちになにを語るか、現在の私たちが今後どのようにこの史跡と風景を守り継いでいくのか考えていきたいと思う一日となりました。

## 15:00 行程終了、倉敷駅へ

美袋交通様、ボランティアガイドの熊城様と宮尾様、西様をはじめ、今回の探訪にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

- 玉島銘菓「やや良寛餅」を希望者の方に購入いただきました。ちいさくて可愛らしい、そして美味しいお菓子を喜んで持ち帰られました。また、終着の倉敷駅へ向かう道中には小林事務局長から閉会のご挨拶がありました。

- 小林事務局長「朝9時からお疲れ様でした。お天気も雨かと思われたものが晴れ間ものぞいて天が味方してくれたような1日でしたね。参加者の方からは玉島の文化についてもっと触れたいとお言葉もいただきましたので、また企画したいところです。途中でご紹介もありましたが12月には山鳥毛の探訪プログラムを計画しております。先着順ですがぜひふるってご参加ください。本日は誠にありがとうございました」

